



KAIBORI News

No.19

2019年1月

●発行
井の頭恩賜公園 100年実行委員会
<http://inokashirapark100.com/>
事務局：東京都西部公園緑地事務所

●編集
認定NPO法人 生態工房
<http://www.eco-works.gr.jp/>



7羽のヒナを育てたカルガモ



水鳥モニタリング報告

かいぼりが行われてから、水鳥の繁殖が回復してきた井の頭池。3回目のかいぼりを終えた2018年も、カイツブリやカルガモの親子が水面に浮かぶ姿が見られた。

かいぼり前の井の頭池には、外来魚のオクチバスやブルーギルが蔓延していた。これらの外来魚は、カイツブリが食物とする在来種の小魚やエビを捕食して減少させていた。しかもサイズが中型～大型の魚なので、すぐにカイツブリが飲み込めないサイズに成長してしまう。こうしたことから、かいぼり前の2013年には、カイツブリは井の頭池で繁殖しなくなっていた。

2014年の1回目のかいぼり以降、オクチバスやブルーギルが激減し、在来魚は大幅な回復を遂げた。カイツブリはこうした変化にすかさず反応し、2014年には3つがいが営巣した。

2回目以降のかいぼりでも引き続き外来魚の増加を防いでおり、カイツブリの営巣数は毎年3〜6つがいが維持されている。今後の保全策としては、外来魚のいない状態を保っていくことが肝心である。

今季は住宅事情も好転

今季のカイツブリの繁殖で特徴的だったのは、抽水植物の茂みで2つがいが繁殖したことだ。これはカイツブリの一般的な習性であるが、以前の井の頭池には抽水植物の茂みがほとんどなかったため、カイツブリは水面に垂れ下がった枝先に巣をかけていたのだ。枝先タイプの巣は強風や増水に弱く、巣が損壊する例が毎年確認されていた。

井の頭池では1回目のかいぼり後に種子からヒメガマが芽生え、生育範囲が少しずつ広がっていった。3回目のかいぼりでは、整備した浅場にそのヒメガマを株分けして植え付けるなどし、新たに生育地を増やしてきた。今季、こうした抽水植物の茂みで営巣したつがいは、台風でも巣が壊れることなく、無事にヒナが誕生した。

ヒメガマなどの抽水植物の茂みは、カイツブリが営巣するだけでなく、さまざまな水鳥の採食や、水生生物の生息にも利用される。いまの井の頭池は水深が深く、抽水植物が生育できる範囲が少ない。浅場を整備する取組を継続して、カイツブリが本来の営巣環境で自然な生活を営み、さまざまな生きものが生息する井の頭池になることを願っている。

珍客飛来

晩秋の井の頭池にミコアイサが飛来した。広い川や湖に棲む、井の頭池ではめったに見られないカモの仲間だ。10月後半に初めて飛来した時は一晩で姿を消したが、11月に再飛来し、数日間滞在した。

魚を食べるミコアイサが滞在できるほど、井の頭池に小魚が増えてきたようだ。次に飛来したときはもう少しゆっくり滞在できるよう、さらによい環境へと再生していきたい。



ヒメガマの茂みに営巣したつがい。巣は流されにくいだけでなく、外敵に見つかりにくくなっている。

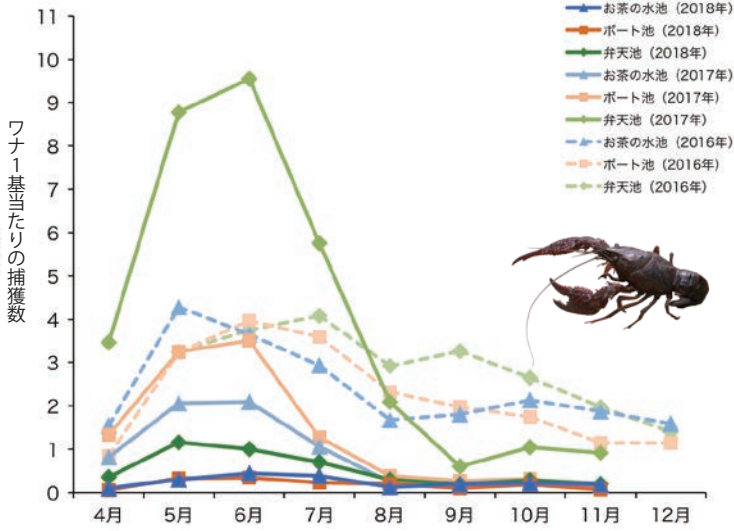


枝先タイプの巣は風雨への耐性が弱い上に、丸見えの状態だった。



Topics

アメリカザリガニ 今季は激減？



外来種アメリカザリガニは、池の水を抜くと泥の中へ逃げるので、かいぼりとは別の対策が必要です。ワナによる防除が5年目となった今季は、前年よりもさらに多い約200基のワナを用いて捕獲に努めました。

今季に捕れたアメリカザリガニは計3449匹で、例年より少なめでした。捕獲に用いているワナ数が毎年異なるので、ワナ1基あたりの捕獲数に変換して比較したところ、今季はこれまでにない低水準でした。前年度は非常に多かった弁天池区域も、同様に低水準になっていました。

捕獲数が昨季までよりも激減した要因にはいくつもの可能性が考えられますが、その一つとして、多数のワナを投じて捕獲圧を高めたことが挙げられます。来季も手をゆるめずに、引き続き防除活動に取り組んでいきます。



ワナ回収の様子



ワナの中身は、アメリカザリガニよりも在来種が目立った

今号のイチオシ！ 自然情報



コガマ、フワフワ。
コガマとヒメガマの穂から種子が噴き出しました。晴れた日は風に漂い、キラキラ輝きます。



ヒメガマを刈って水面を回復する



アカテガニなどが暮らす保護区内の水路

いけいけ！ かいぼり隊

イケメン イケガール
～池男&池女、湿地を学ぶの巻～

かいぼり隊では、活動に必要な知識や経験を増やすために、毎年数回、研修を行う。井の頭池では外来魚問題が解消されつつあり、活動テーマは在来種のすみかの再生へと移りつつある。今回の研修では、湿地帯再生のバイオニアである千葉県行徳鳥獣保護区を訪問し、湿地環境とその管理について学んだ。

この保護区は広い。80ヘクタールの敷地にヨシ原や干潟が広がる光景は、東京湾奥部の原風景だ。トビハゼやアカテガニなど汽水域ならではの生きものに目を奪われる。塩性湿地のほか、水田や淡水池といった多様な環境が整備されている。

水鳥などが棲む湿地の管理の基本は、攪乱の継続だ。増え続けるヨシやヒメガマを刈る。池を排水して重機で掘り返す。こうして開けた水面を取り戻す。手を付けなければヨシなどが密生し、やがて湿地が埋まって陸化していくことになる。

保護区で行われている管理作業を体験した。池に密生しているヒメガマを、長柄の鎌ですばすば刈っていく。1時間ほどで広い水面が回復した。ヨシと漂着ゴミで覆われた水路も清掃して見違えるようになった。

こうした管理作業は楽ではないが、楽しいものである。井の頭池でも、ゆくゆくは浅場に抽水植物帯が広がって、水草刈りをする日が来ることを心待ちにしている。